

2009 - 23

活動名	地域人材育成（笑いと認知症の理解を地域に広めよう）
要旨	施設開設時から介護者や地域の人材育成に注力し、認知症の理解と共に、認知症の人の力を目に見える形で発信するなど、認知症に視点をあてたまちづくりや「人づくり」に尽力。地域と協力し認知症の理解や自然体で支援する体制づくりを行っている。
応募者	有限会社 エーデルワイス 施設長 青山 由美子
連絡先	〒090-0826 北海道北見市末広 350 番地 59

活動内容	地域人材育成(ユーモアと認知症の理解)
活動趣旨	<p><b>認知症の人からの発信</b>・・・グループホーム入居者様が、地域ご婦人達に、うどんつくりの技を伝授。</p> <p><b>地域住民と各事業所と共に行う認知症の理解</b>・・・留辺蘂地区社会福祉協議会・地域包括支援センター・町の介護事業所・老人クラブ・民生委員と行う認知症劇</p> <p><b>小学生へ認知症を通して思いやりの実践</b>・・・春休みの一日をホームで高齢者とカレーライスつくりを行い、昔話を聞かせていただく</p> <p><b>中学生に行うサポーター養成と現場体験</b>・・・中学生認知症サポーター養成学び後のグループホーム触れあい体験</p> <p><b>高校生へ認知症の理解</b>・・・福祉科高校生に一步、先行く実習前の転ばぬ杖の認知症の理解</p> <p><b>笑いの体操を地域へ</b>・・・エーデルワイス恒例の笑いの体操が花園地区新年会と笑いの体操・地域で笑いの先生が誕生・利用者が交流会で行う笑いの体操</p> <p><b>地域で語り、あるべき方向を学び合う地域社会の勉強会</b>・・・</p> <p>・・・地域包括支援センター・連合町内会・高校生・医者・民生委員・認知症の人と家族の会・難病連役員・地域住民で語り、あるべき方向の助言をいただいた。</p>
応募者	有限会社 エーデルワイス
連絡先	<p>〒090 0826</p> <p>北見市末広350番地59</p> <p>TEL0157-61 6670</p>

## 1. 概要

北見市は平成18年に合併し北海道内最大の面積を有するところでもあります。北見市の高齢化率は24.5%と平均よりも高い比率となっております。その北見地域の介護保険施設として認知症の理解と共に認知症の人と地域との交流、認知症の人の力を目に見える形で発信しようと、開設以来、法人全体が取り組みさせていただいております。

日本は古来より儒教の精神が強く根付いており後期高齢者の多くの人達が見識ある精神を持ち合わせていた為に荒廃されたとはいえ、まだしのいで来たのではないかと思います。

今、全てにおいて自由となった世の中で高齢者や障害者の尊厳は必ずしも確立されているものではありません。今の時代だからこそ、認知症という病気を通して認知症の人に視点をあてた、まちづくりが人づくりになるのではないかと思います。

エーデルワイスでは、開設時より理念を基礎に介護者や地域の人材育成に主眼を置き儒教を基礎に、人に親切に親を大事に隣人とは仲良く、今の世の中の課題から地域の課題まで語ることでできる外部講師を招いて、あるべき方向を導いていただいております。

地域の人材育成からは、毎年の継続により少しずつ理解を得られるようになり徘徊者と思われる方の発見には地域の民生委員から直接連絡をいただき、確認後その方の家までお送りさせていただくなど職員と地域との関係性も一歩、一歩良い方向へと築かせていただく状況へと発展し職員共々嬉しく思います。

また事業所が率先して行っていますのは、誰もがなりうる認知症を病気だと理解し、地域で尊厳をもった生き方ができるように今、行っていることは自分達の為に行うことである事を職員全体が地域へ向けて発信を行っています。

また、行政ともキャラバンメイトの養成研修、10月に予定されているキャラバンメイトフォローアップ研修等、行政と共に発信ができますことに感謝させていただいております。

### 《エーデルワイスの理念》

認知症の方の内的世界を理解し、その人の秘められた力やその人が培ってきた生き方、暮らし方を大切にエーデルワイスが中心となり、家族・地域住民との連携を図り最後まで、その人らしい生き方のお手伝いをさせていただく。

管理者・スタッフは常に認知症の方の全人的ケアを目指し、内部研修・外部研修・自主研修に励み、習得した知識・技術は地域に還元する。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・認知症の人からの発信

### 《グループホーム利用者様から地域ご婦人へ、うどんづくりの発信》

7月18日、町内会青少年部合同夏祭り大会

何日も前から、町内会役員さんと打ち合わせを行い、当日を迎えました。認知症の勉強

は皆さん何度も参加いただいている方ばかりですが、その当事者と一緒に作業を行うことは、初めての方がほとんどでした。日頃から、エーデルワイスの利用者様は運動の一環としまして、うどんつくりを行っています。それは、それは、楽しく体を支えてもらいながらも笑顔と一緒に懸命に自ら、うどんを踏み続けます。なかなか、体操を促しても乗り気ではない方でも、うどんつくりは積極的に行っていただける場面となります。その、うどんの足踏みや包丁さばき、うどんの“のし”の方法を含めて「てづくりうどん」を学んでいただこうと、地域のご婦人に呼びかけ一緒に手作りうどんと試食会を始めました。当日は、エプロンを着けると現実に戻り拒否ができません。昔の思いの中で、うどんつくりをしていただく為には、余計な手出しは無用となりました。もくもくと、笑顔の中で行う、うどんつくりの手さばきに参加者のご婦人達も手つきの良さに驚いておりました。「昔はみんな、このように家でつくったものだよ！今はつくらないのかい」・・・と、少々耳の痛い話でしたが、できあがったうどんは、さすがに腰のある良いうどんとなりました。



#### 《地域住民と各事業所と共に行う認知症の理解》

～住み慣れた地域で暮らし続けられるまちづくり～

高齢化率35%を超える北見市留辺蘂町自治区におきまして包括支援センター・社会福

社協議会・民生委員・老人クラブ・訪問介護・居宅介護支援専門員・ディサービスにより認知症劇団「わすれんぼ」を結成、留辺蘂地区の住民と事業所の皆さんが練習や打ち合わせから一つになることができました。北見市では、それぞれの包括支援センターが主体的に認知症のサポーター養成を発信しておりますが、留辺蘂地区包括支援センターには「わかりやすいものがいい」との住民の要望から、包括支援センターとエーデルワイス職員が調整を重ね“住民を巻き込んだ認知症劇”を行いました。当日は、老人クラブの会長が白衣を着た姿に会場から学生時代のような乗りの声が飛び交い、知り合いの民生委員の白熱した演技には、「上手！」と会場と客席は一体感となり、まさに顔が見える認知症の理解に近づきました。包括支援センターセンター長は、高齢化率の高い地域だからこそ、住民一人ひとりが、自分達の地域は自分達が守っていくという意識を、持ち続けることが必要と話されてました。





自宅からご本尊まで・・・！

やり遂げた気持ちで一杯となりました。

平成21年3月30日《小学生へ認知症を通して思いやりの実践》

《春休み福祉体験教室》

事業所で春休み福祉体験教室

## 春休みボランティア体験学習会

とき：平成21年3月30日  
場所：エーデルワイス

主催：社会福祉法人  
北見市社会福祉協議会



エーデルワイス

35



事前学習風景です。



手さばきをお年寄りから、ほめられました。



「朝は3時から働いたんだ！」と・・・

現場にはNHK北海道が取材に来所され、北海道中に小学生等の働きが放送されました。放送された映像を見て、お年寄りは互いに笑い合う場面となりました。

これから超高齢社会を担う子供達が少しでも「お年寄りは優しい、認知症になっても力はあるんだ」との思いが残ればと、目標に実施させていただきましたが、脳梗塞で言葉が思うように話すことができない利用者様も、何とか今の子供達に昔の暮らしの厳しさを伝えたいと積極的に話す場面があり、中学生も真剣に傾聴されている場面に目頭が熱くなる思いがしました。

体全身を使い懸命に話す高齢者の姿から、何か大事なものを子供達はいただいた気がしました。

.....

6月6日《地域で語り、あるべき方向を学び合う地域社会の勉強会》

「地域における子供と老人が住みやすい社会の仕組みをつくるには」



・第1部は、「住みやすい地域づくりを目指し発信している学生の立場から」社会福祉協議会ボランティア高校生が提言です。



第2部は、「高齢になる町内会を、どのように町内会組織でまとめてゆくのか」  
連合町内会会長3名(3地区の町内会長)からの提言。

社会福祉協議会、包括支援センター会長からの提言。

・第3部は、「日本が歩んできた歴史的背景と現代の家族のあり方」

難病連会員、認知症の人と家族の会からの提言。

・第4部は、「介護保険の改正と地域包括支援センターの今」

地域包括支援センター、北海道介護福祉士会会長からの提言。

・第5部は、「在宅医療の立場から」として、医師からの提言。



どの提言者からも地域を拠点に置いた身近な考え方を、スタッフが示す5分以内と言うサインを受け端的にまとめておりました。上記提言を受けて早川浩士氏より、それぞれのあるべき方向についての助言をいただき、各提言者からの身近な話に頷く場面があり貴重な時間を約70名の地域の皆様と共に考える時間をいただきました。



《高校生にセンター方式とサポーター養成》

《高校生へ認知症の理解》

剣淵高校福祉科1年から3年までの全生徒にオレンジリングが行き渡りました。校長先生、自ら勉強会に入り両親を思い起こしながらの受講となりました。

受講生の中には、軽度認知症になった同居中のおばあちゃんへの対応のまずさを自身が気付



いたという文章や、これから実習へ入る予備知識となったとの意見、自分が今後地域のお年寄りに積極的に声をかけさせていただこう!等、純粋な高校生の中から、しっかりと認知症の人が日々苦しんでいる思い、言葉、昔の懐かしい話の大切さなど、人としての



係わりの大切さを学んだとの感想を含めた文章を、ほぼ全員からいただきました。一部紹介させていただきます。

私の祖父母は認知症です。最初の私は、祖父を遠ざけてしまいました。どう接しているのかわからなかったのです。祖父が認知症になって1年はすぎ今では、自分の考えも落ちついて祖父と接していています。お話を聞いて、今までより、祖父のこと、認知症のことを、理解する事ができました。「受容」が大切で受容するということをお忘れずに祖父と向き合っていこうと思います。ありがとうございました。3年 H.I

今日は、わかりやすく指導していただきありがとうございました。今まで、良くわかっていなかった認知症の事をわかりやすく、楽しく学ぶことができました。これから、いつ、どこで認知症の人と接するのかわからないので、今回の授業で学んだことを忘れないで頑張っていきたいです。

もうすぐ、実習に行くので、今回の授業を思い出し、生かせるようにしたいと思います。うでにつける緊急バンド、かわいいです。なかなか、手に入らない物みたいなので大切にしていきたいと思います。ありがとうございました。3年 K.I

.....《中学生に行うサポーター養成と現場体験》

今年も中学校でサポーター養成！

中学生からの認知症の理解の依頼では、1年生104名の希望があり、事前アンケートからより深めた認知症の勉強会にしようとする担当の先生の協力もいただき実施することができました。



事前アンケートから、自分が5分前の事も忘れる病気になったら自分は思うだろう・・・という疑似体験をさせていただきました。

#### (アンケートの目的)

- ・ 認知症の人を身近に感じていただく。
- ・ 自分が障害者になったとき、どのような気持ちになり、どのような支援を受けたいか。
- ・ 地域には、いろいろなハンディをもった人々が暮らしていることを心で感じ、自分がいかに健康で暮らしていることを感謝できるか。
- ・ 誰もが暮らしやすい町は、どのような町なのだろう・・・と考えることができる。

#### (あなたが5分前のことも忘れる病気になったら・・・)

- ・ 悲しい・何もかもわからなくなるので死にたい。
- ・ 頭が真っ白になる・何が何だかわからない・絶望する・どうしようか・ご飯食べたいけどお腹が重い・今、何で立ち上がったのだろうかさみしい・孤独を感じる・早くここから逃げ出さなくちゃ・パニックになって暴れる・生きていくのが嫌・わからない
- ・ やったことをメモる習慣をつかせ前向きに生きていきます。

#### (あなたは認知症という病気になった人をどのように思いますか・・・)

- ・ かわいそう・よくわかりません・普通の事が出来なかったらその人にあった扱いにしよう・どうも思わない・生きていくのも大変だと思う・世話する人も大変だ!・助けてあげたい・悲しくて泣く・一日のことを日記に書いて思い出す・早く治ったらいいな・あまりなりたくない病気・かわいそうだとは思いません・すごくかわいそうだけど、一日一日をしっかりと生きてほしい

このような回答を受け「認知症になっても力はあるのだ」という尊厳を主にした組み立てを行いました。

当日は、お腹から精一杯出す笑いの体操から始まり、ほぐれたムードの中進めることができました。楽しい中にも、

認知症という本人にとって辛い病気になっても家族のことを心配している事。

みんなの笑顔や優しい言葉をいただくと勇気や力になる事。

認知症の人が断片的にしか話すことができなくなっても、その言葉に深い意味がある

事。

過去の頑張った話をするときの表情から、認知症の人がどのような気持ちになっているのかを探ることができる事

センター方式のその人らしさを探る事が上手く伝えられなくなった認知症の人の“喜び見つけ”になる事

みんなが、5分前に忘れる病気になったら・・・と、仮定の中で考えた事が認知症の人が体験していることと同じ事だった。

地域には自分の他に、様々な人達がいて地域が成り立ち、少し元気な自分の発信で幸せを与えることができることが、自分達住みやすい地域になること。

11月には、皆さんが事業所へ来ることを多くのお年寄りが首を長くして心待ちにしていることを代弁させていただきました。学校の主体的導入により直接触れあう場面に人として大事な部分が心に染み渡り、これからの人生に潤いが増すような交流になるよう今から組織全体が取り組み中です。

写真は昨年(2022年)の訪問からです。





涙を流して喜ぶお年寄りの姿に生徒の皆さんも心が温かくなった様子でした。

.....

平成21年1月 《笑いの体操を地域へ》

花園地区新年会と笑いの体操・認知症を予防しよう。

北見市内自治区、花園町内会から今まで新年会と言えば難しい話ばかりだったが、今年は笑いと、わかりやすい認知症を教えていただきたいと依頼があり、職員と共に参加させていただき、簡単な認知症の理解の後、全員で笑いの大会を行いました。

笑いの大会風景



新年から「笑いを生活に取り入れ認知症を予防しよう・・・と」真剣に聞いていただき楽しく笑っていただけました。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・その他、 地域との交流

運営推進会議後のクリスマス交流会

(利用者・家族会・地域住民・町内会役員・高校生・先生・地域ボランティア)



サポーター養成を行った留辺薬高校の生徒と先生も参加し風船人形を作っていました。

### 活動の成果と、今後の展望

小さな有限会社からの発信は継続することが力となる事を5年目に入った今から教えていただいた思いがいたします。継続から周りの理解が得られ行政との連動もできるようになりました。これからも少ない年金からも、いただいている介護保険料や税金から介護報酬としていただいている事を忘れず、スタッフが一丸となって力まず、焦らず、ゆっくりと進んでいきたいと思えます。また、認知症サポーターとなった皆様方が義務なく、地域で自分の時間にあわせた行動ができる体制づくりを地域包括支援センター、保険者と微力ではありますが一緒に模索させていただきたいと思えます。

認知症だからこそ、重度だからこそ、外でつろぐことができる街づくりを目指し、見える社会交流からの認知症の人の理解や自然体で支援できる体制づくりを目指していきたいと思えます。